血液培養にて分離された *Gleimia*(*Actinomyces*)*hominis* の一例

◎田上 夏妃[1)]、稲葉 美香[1)]、三野 博利[1)]、永田 邦昭[1)]
地方独立行政法人くまもと県北病院機構 くまもと県北病院[1)]

【はじめに】*Gleimia hominis* は以前 *Actinomyces* 属に分類されていた放線菌の一種で、2010 年に 89 歳女性の創傷部より分離されたのが最初である。微好気性ｸﾞﾗﾑ陽性桿菌で、ｶﾀﾗｰｾﾞ、CAMP 反応、酸性ﾎｽﾌｧﾀｰｾﾞ、Nｱｾﾁﾙ-β-ｸﾞﾙｺｻﾐﾀﾞｰｾﾞおよびﾗﾌｨﾉｰｽ発酵が陽性とされている。今回本邦初例と考えられる本菌感染例を経験したので報告する。**【症例】**90 代女性**【基礎疾患】**胃癌,高血圧,脂質異常症,ｱﾙﾂﾊｲﾏｰ型認知症,便秘症**【現病歴】**数日前より血液混じりの嘔吐が出現し、受診当日の昼に 2 回ｺｰﾋｰ残渣様嘔吐を認めたため、当院へ救急搬送となった。**【入院時検査所見】**血液検査では貧血がある程度で、明らかな炎症所見は認められなかった。**【微生物学的検査】**入院時に血液培養(2ｾｯﾄ)が提出され、培養 3 日目に嫌気培養ﾎﾞﾄﾙが陽性となり、ｸﾞﾗﾑ陽性桿菌を認めた。培養ﾎﾞﾄﾙの増殖曲線は一旦ｸﾞﾗﾌが下降し、再び上昇時に陽性と判定されるという特殊なﾊﾟﾀｰﾝを示した。培養液から直接、質量分析装置(MALDIﾊﾞｲｵﾀｲﾊﾟｰ)にて同定を試み、ｽｺｱ2.28 で *G.hominis* と同定された。同定結果より、ｻﾌﾞｶﾙﾁｬｰにﾌﾞﾙｾﾗHK 寒天培地(RS)(極東製薬)を追加し、嫌気培養を実施した。培養 1 日目のﾌﾞﾙｾﾗHK 寒天培地に微小ｺﾛﾆｰを形成したが、継代培養の結果、嫌気培養よりも発育は遅いものの、5%炭酸ｶﾞｽ培養でも発育することが確認された。薬剤感受性試験はﾗｲｻｽS4(日水製薬株式会社)にて実施し、結果報告を行なった。ﾍﾟﾆｼﾘﾝ系薬とｾﾌｪﾑ系薬には感受性を示したが、levofloxacin と metronidazole には耐性を示した。**【入院後経過】**入院後、進行性胃癌で余命 1～2 ヶ月と診断されたため、積極的な治療は実施されなかった。**【考察】***G.hominis* の分離例は本邦初例と考えられるが、患者は癌末期であり、通常は感染を起こしにくい本菌が、腸管壁から、または嘔吐後の誤嚥に伴う炎症部位から流血中に侵入し、菌血症に至ったものと推察された。血液培養の特殊な増殖ﾊﾟﾀｰﾝは、ｱﾐﾝ産生によるｱﾙｶﾘ化が原因とされている。同様の代謝経路を持つ菌には、本菌が以前分類されていた *Actinomyces* 属、*Bacteroides* 属、*Arcanobacterium* 属などが知られている。　連絡先：0968735000　(内線 263)